
灰塵

ゆいまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰塵

【Nコード】

N2125H

【作者名】

ゆいまる

【あらすじ】

君との恋愛は純粹なものだと思っていたのに、君の打算に気がついた時、僕らの恋は灰になった。口に広がる煙草の苦みに気がついた僕が帰る場所は……。

彼女との恋は、本当に純粋なもので、ただ彼女と一緒にいたい、その願いのみで構成されていたようにも思う。

つい5分前までそこにいた彼女の影を探すように、俺は向かいの席に目を向けた。

初めて二人だけで来た喫茶店。

まだ仕事の先輩と後輩でしかなかった俺達は、会社から遠いこの場所で偶然に顔を合わせた。

まだ蝉の音が我が物顔で世界を支配する頃だ。

外の暑さから逃れる様に飛び込んだここで、彼女に出会った時、不思議と驚きはしなかった。

彼女も同じようで、当たり前のように同じ席につき、当たり前のように同じランチを頼んだ。

社内の彼女は目立たない真面目な子で、悪く言えば地味だと思っていたが、話すと古くからの親友のように俺の舌は滑らかになった。彼女もよくしゃべった。

彼女の声なんて仕事での事務的なやり取り以外では聞いたことなかったし、ましてや笑う所なんか見たことなかったから、夏の陽射しに咲いた彼女の笑顔に隠れた名店を見つけたような気分になって、それから俺はそのリピーターになっちゃった。

煙草に火をつける。

あの日の陽射しはすっかり萎えてしまい、今、ここをぼんやりと照らすのは色のない分厚い雲を通した冬の鈍い奇妙な明るさだ。

ふと外に視線をやると、昼とも夜とも判別が難しい空が、ずっしりと上空を覆い尽くしており、その下でわざとらしくはしゃぐクリスマスネオンが同じパターンで点滅していた。

街路樹が色づく頃には、ここで待ち合わせをして二人で出掛けるのが常になっていた。社内で線引きして接しないといけない分を埋め合わせするように、俺達は二人になると親しく口をきき、手を深く繋ぎ、時に肌を合わせた。

誰かの髪の毛の香りが切なく胸を締め付けるなんて、彼女と出会うまでは知らなかった。

彼女に会えない時間の流れのあの遅さと、彼女と二人でいる時の早さを恨めしく思ったし、だからなおさら大切に思えた。

とはいえ、社内で特別余所余所しかたわけでもない。素知らぬ顔をしながら、ポストイットでの二人にしかわからない言葉のやり取り、電話を繋いでもらった時に交わす視線、全てが胸を高鳴らせた。

そう、ちょうど初恋の様な感覚だ。

彼女の姿を一目見たくて、仕事を急いでまとめて休憩室に駆け込んだ事もある。

彼女と目が合うと気恥ずかしくて、不機嫌を装って反らしてしまうこともあった。

胸の中で羽化した蝶は、彼女に関するものになにか触れるだけで羽ばたき、くすぐったい思いをさせた。でも、それはもちろん不快ではなく、むしろ毎日を生き抜く励みになった。

彼女を知れば知るほど愛おしくて、守りたくて、気がつくともう、彼女なしの生活が考えられないようになっていた。

つまらない事や、腹の立つ事があっても、彼女の笑顔一つで救われた。

彼女も、僕のおかげで救われている、あの時は確かに、そう、言っていたのに。

今日、急に呼び出された。

休日に会うのは、これが初めてだった。しかし、電話口の彼女の声に、俺はいても経つてもいらなくなり家を飛び出した。

そして、今、告げられたのは

―― 私、結婚する事になったの

俄かに理解ができなかった。

彼女はそんな俺に弁解をした。

「付き合う前から、本当は決まっていた事なの。もしかしたら、結婚から逃げたかったのかもしれない。あの時、結婚が嫌で嫌で……だから、アナタに。でも、本当にアナタの事、好きになり始めていた。だから、怖かったの」

怖い？

わからなかった。

君との恋は純粋なものだったんじゃないのか？

ただ会いたくて

ただ触れたくて

ただ傍にいてたくて

火を付けたのはお互い様だ。なのに、君はそのまま逃げるのか？

責め立てそうになる自分の唇を噛みしめた。

「ごめんなさい」

何度も重ねた唇が、まるでずっと奥底に隠していた秘密打ち明ける様に溜息にこじ開けられ、そして突きつけてきたのは

「私はただ好きなだけじゃ、不安なの」

彼女の本音だった。

そして彼女は静かにここから出て行った。

彼女の髪の毛の香りも、もうここには残っていない。

漂うのは、火を付けただけで体に微塵も染みてこない紫煙だけだ。

純粋な恋なんてこの世には何のかもしれないな。

彼女を責めるような言葉に自分でも嫌気がさして、そのまま煙草を灰皿に押し当てた。

鞆で携帯が震える音がした。

ため息をついてそれを取る。

「もしもし？」

『パパ、お仕事まだ？』

「もう、終わったよ」

『なら、早く帰ってきてね。子どもたちも待っているから』

携帯を閉じる音が無性に空っぽの胸に響いた。

そうだ、俺には家庭が待っている。妻も子供も『父親』の俺の帰りを……。

鞆を手にとった。

窓ガラスに映った自分の姿を見た。

灰色のその姿はくたびれていて、まるで灰皿の上の煙草のようだ。

純粋な恋と言い訳して、不倫相手に何も約束しない狡猾な大人の俺に、純粋な恋を語る資格なんかないのだろう。

そして心だけで満足できない彼女もまた、大人なのだ。

ふと、あのネオンサインの前を高校生が手をつないで歩いているのが見えた。

約束も決まった未来も見えない、そんな不安の中にいる方が、見えない何かを信じられるのかもしれないな。

帰らぬ季節に苦笑いをして、俺はゆっくりと席を立った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2125h/>

灰塵

2010年12月14日14時53分発行